

総合科学技術・イノベーション会議  
第9回 世界と伍する研究大学専門調査会

1. 日 時 令和3年10月8日（金）12：00～13：57
2. 場 所 オンライン開催  
セットアップ：中央合同庁舎第8号館5階共用会議室C
3. 出席者 (世界と伍する研究大学専門調査会 委員)  
上山隆大会長、橋本和仁委員、篠原弘道委員、安宅和人委員、  
遠藤典子委員、金丸恭文委員、川合眞紀委員、小林喜光委員、  
白石隆委員、菅裕明委員、富山和彦委員、林いづみ委員、  
村山齊委員  
(文部科学省)  
柳孝文部科学審議官、千原由幸科学技術・学術政策局長、池田  
貴城研究振興局長、増子宏高等教育局長  
(内閣府)  
米田建三統括官、井上諭一事務局長補／審議官、合田哲雄審議  
官、渡邊倫子参事官、生田知子参事官、當間重光参事官、北野  
允企画官、板垣雅政策企画調査官
4. 議題 (1) 大学ファンドによる支援の基本的考え方について  
(2) その他

【配布資料一覧】

- 資料1 大学ファンドによる支援対象の考え方

## 開 会

### 【上山会長】

本日はお忙しい中御出席を下さいまして、どうもありがとうございます。ただいまから第9回世界と伍する研究大学専門調査会を開催します。

それでは、早速本日の議題に入ります。

本日は前回に続きまして、大学ファンドによる支援の基本的考え方について議論をお願いしたいと思います。

まずは、事務局の方から資料を説明させていただきます。委員の皆さんから議論をその後で頂くという予定にしております。どうぞよろしく申し上げます。

### 【生田参事官】

資料1に基づきまして、事務局の方から説明させていただきます。

資料1、タイトルにございますように、本日は大学ファンドによる支援対象の考え方を御議論いただこうと思っております。

最初の方、閣議決定や目次ですので、早速4ページ目にいっていただきまして、この専門調査会ではこれまで世界と伍する研究大学の実現ということで、期待される姿等々について海外の方々からのヒアリングも含めて御議論いただき、中間まとめを取りまとめでいただきました。本日から後半戦ということで、支援の在り方、具体的にそのファンドでどのように支援をしていくべきかといったことを御議論いただくんですが、今までの議論の少し振り返りをさせていただきます。

この4ページ目のところ、まず我が国の大学が目指す全体像を少し模式化して書かせていただいております。今回、専門調査会では、世界と伍するトップレベルの研究大学群に対する大学ファンドの御議論を頂いておりますが、当然、政府といたしましてはそこのみならず、特定分野のエッジを持つ研究大学群ですとか、地域の中核となる大学群、そしてさらにその裾野という意味では学術の多様性の確保や優秀な博士課程学生への支援、こういったある意味個性豊かで多様な大学群、こういったものを形成して、その層の厚み、これを我が国の強みとして、大学全体として世界の知的競争をリードしていく、こういったことが大学の目指す全体の姿ではないかというふうに書かせていただいております。

続いて、5ページ目でございますけれども、5ページ目は大学の目指す全体像の中のファン

ドで目指す大学像に少しフォーカスを当てて書かせていただいた資料でございますけれども、左のところに、正にこれまで前半で様々御議論いただいておりますが、そういったことを少し簡素化しながら書かせていただいた図でございます。

四つの要素というふうに括らせていただいておりますが、Research universityの機能強化、そして優秀なP h . Dの輩出、さらにはJunior facultyの育成ですとか、学問領域の創出・育成、こういったものの四つを戦略的にどんどん伸ばしていく。これによって、現在の社会構造から大学の駆動力としながら、次の世代への社会構造へと転換していく。こういったことをこのファンドによって実現しようとしている大学には期待されるのではないかというふうに考えてございます。

そうなりますと、このファンドで実現を目指す大学像から、ある意味バックキャストをする形でファンドによる支援対象、どうあるべきかというのを検討すべきではないか。そのときにどういう観点を見るべきかというのを具体的なイメージとして幾つか事例を右側に並べさせていただいたものでございます。

当然ながら、世界と伍する研究大学を目指すからには、P h . Dの輩出能力ですとか、活躍が期待される若手P Iの存在、世界トップクラスの研究者・学生が糾合するような研究領域の存在等々、こういったものをまず備えていること、こういったポテンシャルを持っていること、そしてプラスの下に書いてございますように、そういったポテンシャルをどのように引き出して更に高めていくのか、そういった大学のビジョンといったものを支援対象を考えるに当たっては見るべきではないかというふうに整理をさせていただいております。

6 ページ目では、そのように実現を目指す大学、これを我が国として幾つ、どのくらい持つべきなのかというところを論点として提示させていただいております。

左側には、これまでの専門調査会で海外の方からのヒアリングということで頂いた御意見を少し紹介しております。一番下には専門調査会における委員の皆様方の御意見を少し書かせていただいております。

こういったことから踏まえますと、右側に二つ論点として書いてございますが、まず1点目、数としましては先進諸国の経済規模とトップ研究大学の数、この関係性を踏まえながら、我が国でもこのファンドで支援すべき対象大学の必要校数というものを考えることが必要なのではないかというふうに書かせていただいております。

星印のところ、これは御参考という意味ですけれども、G D Pの規模、これと世界大学ランキングでのトップ50にランクインしている数、この関係性をそのまま例えば当てはめると、

日本の大学から5から7校程度ランクインすることが必要というのが算出されるところでございます。

二つ目の論点としては、じゃそういった必要校数、ここに向けてどのように増やしていくかというところでございますけれども、一度に対象大学を決めるというよりは、当然ながらやはりファンドからのキャッシュアウト可能な支援規模、これが推移していく、どんどん増えていくという状況でございますので、最初から必要校数全てを支援するというのではなくて、段階的に増やしていくということを二つ目の論点として提示させていただいております。

続きまして、7ページ目でございますけれども、こちらは具体的な支援の在り方を後半御議論いただくんですけれども、それに当たってまずこのファンドの持つ意義、これを一回論点として整理をさせていただきました。いろいろ書いてございますけれども、このファンド自体はやはり「従来型の国の大学支援策とは異次元の資金源であること」、そしてだからこそ基盤的経費とか競争的研究費とは明確に趣旨が異なるという意味でも、明確なビジョンに基づいて各大学から骨太な提案を頂き、それに対して細切れではない総合的な支援、これを実施するべきではないか。真に世界と伍する大学への転換を宣言し、更に実行する、そういった大学のみを選んで支援すべきではないか。

最後に、ステークホルダーからの共感を引き出しながら、納税者に対する責任というのをしっかり果たしていくことを求められるだろうというふうに整理させていただいております。

続いて、8ページ目でございますけれども、そういった意義を持つファンドによる支援の対象大学として期待される要件を論点として整理しております。

こちらについて、先ほどファンドにより実現を目指す大学像を5ページ目で整理させていただきましたが、そこで書かれていることも踏まえまして、やはり研究上の土壌、ポテンシャルの存在ですとか、そういったものをどのように引き出して、更に高める、そして卓越した学問領域の創出ですとか、若手研究者の新たな研究への挑戦、これが次々に行われる、こういった研究大学をどうやって実現をしようとしているのか。さらには社会像、こういったものを描いて行って、そこへどうやって転換していこうとしているのか。つまり大学のビジョンをしっかりと評価していくことが必要ではないか。そのビジョンを実現する、その実現可能性を見る観点から、一つの判断材料といたしましては、現状における卓越した研究ポテンシャル、これが一定の多様性を持っていることを目安を客観的な指標として設定することが必要ではないかというふうに整理しております。

なお、この一定の多様性の意味合いでございますけれども、この三角形の図の左に三つ書い

てございますが、当然新結合、異分野の結合によりまして新しい価値を生み出しまして、それが成長し続けること。こういったことが世界と伍する研究大学には求められるだろうといった観点からも、一定の多様性を持って、卓越したポテンシャルを持っている。こういったことが望ましいのではないかというふうに書いてございます。

そして、そういった研究ポテンシャルに加えまして、大学が持つ知的資産から新しい資金の流れを生み出す、そういったことによる事業成長へのコミット、そして生み出した資金を次の世代の若手研究者、若しくは研究基盤、そういったものにしっかり再投資していく。それによって初めて実現される持続可能に成長する、いわゆる公共性のある経営体である大学に求められるガバナンス、具体的には合議体の意思決定機関を有する、こういった観点も併せて支援対象大学として期待される要件と言えるのではないかというふうに整理しております。

続いて、9ページ目、ここからは少し研究力のどうやってそのポテンシャルを見るかという論点に移ります。

9ページ目は、まず総論的な話でございますけれども、我が国自身、これは総体としてでございますけれども、どんな分野が強いかというのを御参考までに示したものでございます。N I S T E Pの調査結果をここにお示しさせていただいておりますが、圧倒的に物理学の分野が我が国は強いということが見て取れるのではないかというふうに思っております。

続いて、10ページ目以降が大学ファンドによって支援するに当たって、その支援先が保持することが期待される研究力、こういった観点から見ていくべきかというものを幾つか紹介させていただければと思います。

10ページ目は、指定国立大学法人を決めるに当たりまして、どのような視点を見ているのかというものを参考にお示ししております。研究力、国際協働、社会との連携、こういった三つの観点から指標にして、指定国立大学法人が指定されてございます。現状、この指標全て兼ね備えているのは国立大学10校でございますけれども、その指標で御参考という意味で、私立、公立、これはTop10%論文数の上位の私立と公立の2校を選ばせていただいておりますけれども、その状況を下に示しております。

ただし、やはりこれは飽くまでも国立大学を見るための指標でございますので、一番下のポチのところの書いてございますように、この指標を今回の国公私共通である大学ファンドに当てはめるのは、なかなかやっぱり限界があるのではないかと。特にここで言いますと、社会連携に係る指標などは、やはり財務構造が関係してくる指標でもございますので、その辺からこれをそのまま当てはめるとするのはなかなか難しいというふうな論点とさせていただいております。

す。

続いて、11ページ目、他の指標はどうかということで、ここには5つの指標をまとめて書いているものでございます。もちろん、これは研究力がある意味、いろんな側面、総合的に把握する、そういった観点では大変有効なものであるというふうに書かせていただいておりますけれども、一方でこれを公平で世の中に見せたときに、明確な基準として設定していくというのはなかなか限界があるのではないかと。言ってみれば、どの指標にどれだけのウエートを付けるのか等々、そういったことに対してどういうふうな説明をしていく、どういう理由で、例えばこの中ですと論文数が一番重要な指標というのかどうか等々。そういったことから、複数の指標をうまく活用するというのはなかなかこれも限界があるのかなという論点とさせていただきます。

続いて、12ページ目、13ページ目、こちらは参考でございますけれども、THEとQSの大学ランキングを書かせていただいております。この大学ランキングの中でも、いわゆる研究に係る側面を見る部分がございますので、これは飽くまで結果でございますけれども、このような形で両者の大学ランキングというのは提示されているということを御理解いただければと思います。

ただ、こちらと同じことが言えるんですが、この総合評価を出す際に、結局、例えばQSですと、この教員当たりの論文引用数は2割がその指標としてウエートがございますし、THEですと研究で3割、この研究の中でもReputationだとか教員当たりの研究収入等々、それぞれ細かくウエーティングされてございますが、このウエートをどうやって設定するのかというのはかなり恣意的な判断が入り得る余地もあるというのは御理解いただけるかと思っております。

続いて、14ページ目でございます。

じゃ、どうしたらいいのかということなんですけれども、一つ言えるとしたら、やはりよく使われているTop10%論文数というものがあるのではないかとというような論点を書かせていただいております。ここで資料1の別紙を御覧いただければと思います。大変細かな資料になっていて申し訳ございませんが、こちら4枚続きの資料になってございまして、いわゆる論文のデータベースのWeb of ScienceとScopus、そしてTop1%とTop10%、計4種類のデータベースの資料になってございます。左側に海外の大学、右側に日本の大学を並べてございまして、それぞれ、例えばWeb of ScienceのTop1%を見ていただきますと、ESI分野、22分野ございます。その分野において、例えば一番左端、スタンフォード大学でございますが、スタンフォード大学が化学の分野においてTop10%論文数のランクが何位なのかという意味でこの数字が置

かれております。

そうしまして、少し下にさせていただきますと、研究ポートフォリオ分野及びその他の分野におけるランクイン分野数とございますけれども、こちらはE S I 分野22分野を便宜的に研究ポートフォリオ分野とその他、その他というのは人文社会系が多いんでございますけれども、計9分野に括って、更に先ほど論文数の順位が何位かというものを30位以内、50位以内等々で何分野そこに位置付けられるかというような形で整理をした図でございます。

更にその下にさせていただきますと、全分野まとめた形のランキングや、Faculty Staff数、Faculty Staff数当たりの論文数、こういったところを参考として情報を提示させていただいております。

この資料を見ていただいて、先ほどの資料1の14ページ目に戻っていただきますと、このような形でTop10%論文数の分野ごとの強みというのが見えるかと思うんですけれども、二つ目のポチにございますように、高い研究水準を有するトップレベルの研究大学として卓越した異なる分野間の対話・結合、そういったことから新しい価値を生む、それによって成長をもたらしてグローバル社会を変革する。そういったことを考えますと、一定程度の耐用性、そして強い学問分野、こういったものを備えていることが必要ではないかというのをまず論点として書かせていただいております。

さらに、その保持されることが期待される卓越した研究領域の状況、そもそもどんな状況を我々は期待するかという観点でございますけれども、これに当たりましては、先ほどの別紙を眺めていただきまして、世界の状況との比較、これも重要だと思っております、そういった比較も考慮して分野別のTop10%論文数につきまして、卓越した研究分野が一定程度の広がりを持つこと、これを考慮する必要があるのではないかというふうに論点として書かせていただいております。

なお、先ほどはTop1%、Top10%の情報を出させていただきましたけれども、あえてここでTop10%にしている理由は、注意書きにございますように、やはりTop1%論文数ですと母数が少ないという中で、特徴的な論文の結果が大きく影響しやすいのではないかとということで、Top10%のWeb of ScienceとScopus、どちらかでといったことで考えていくのがいいのではないかとこのように思っております。

また、卓越した研究分野、「例えば」の括弧の中でございますけれども、「世界上位1,000校の中で平均を超える位置」にあると書かせていただいておりますのは、先ほどの別紙で研究ポートフォリオ分野等々と書かせていただいているところがございますけれども、この

1,000位以内というものがこの表の中にございますが、この中で大体真ん中ら辺ぐらいというようなイメージをしていただければと思います。

なお、この1,000校というのはどういった意味合いがあるのかということをございますけれども、この上位1,000校のTop10%論文総数というのが、Top10%論文数全体の約9割を占めているということを御参考いただければと思います。

最後、「一定程度の広がり（例えば「約半分の研究分野）」について、先ほど述べた「一定程度の多様性」のところをどう言うかをございますけれども、先ほどの研究ポートフォリオ分野プラス1、計9分野、この約半分といったようなイメージをここでは書かせていただいております。

続いて、15ページ目、今のようなある意味一定の強さを一定の広がりを持って持つというような指標は、以前、特定国立研究開発法人を指定するに当たりまして使われた指標に似ているということで、こちらで参考に書かせていただいております。当時は全22分野、これはWeb of Scienceの方をございますけれども、3分野中で100位程度というのと、あとは特定の分野、卓越した機関、物質・材料研究機構はこれで指定されておりますけれども、図の右側、22分野について1分野で10位程度、このような指標が当時は設定されていたというものでございます。

続いて、16ページ目、こちらは少し話は変わるんですけども、いわゆる複数の大学が連携するパターンでございます。当然、今後こういったものも出てくるであろうということを考えますと、複数の大学が連携した上で、まずガバナンスに関する要件は当然ながら全ての法人、これをクリアすることが大前提だろうと。それから、その連携の仕方をございますけれども、いわゆる連携協定での締結、そういったものも当然あるかと思いますが、それだけにとどまらず、やはり制度として今あります、複数大学のような組織的な連携を求めていくことが必要ではないかというふうに書いてございます。

なお、申請単位は、これは指定国立大学法人にとってもそうですが、法人とするか大学とするか、これは事務的な話もございますが、今後検討しなければならないということで論点とさせていただきます。

続いて、17ページ目でございます。

今まで少し研究力にフォーカスをして、ある意味ビジョン実現可能性、これを高めるために保持することが期待される研究力、この目安の議論を論点に出ささせていただいておりますけれども、当然ながら支援対象大学を決定する際には、そのみならず、トータルとしての大学のビジョンを見るべきではないかという論点がございます。



では、どのようなビジョンを見るべきなのか、といったところをこの17ページ目ではまとめさせていただいております。総合的に判断するに当たっては、二つ目のポチに書いてございますように、教育研究システムに関すること、例えば優秀な研究者獲得に向けた取組や優秀なPIや若手・博士課程学生への支援の取組、国家としての戦略重点分野や分野融合・新興領域の開拓、インブリーディングに対する抑制的な姿勢等々、こういったことをしっかりと確認することが必要であろう。

更に、ガバナンスですとか事業・財務戦略、こういったものを総合的に判断する。ただし、よく言われるような、いわゆるそれぞれの視点、これを全部点数化して足し算をする、そういったことではなくて、トータルとして総合的な判断をしていくことが必要ではないかというふうに書いてございます。

最後のポチ、当然ながら定性的になってしまう部分もございますが、その中で事業成長、そして研究力に関する部分につきましては、それぞれ国際的なベンチマークも踏まえた上で定量的なアウトカム指標の目標値をしっかりとコミットメントさせ、その妥当性を確認することが必要ではないかというふうに、論点としてさせていただいております。

続きまして、18ページ目以降、具体的なファンドによる支援の在り方、支援の内容の部分でございます。

まず、18ページ目の最初、ファンドによる支援期間、それから支援の打切りも含めたモニタリング評価でございますけれども、結局このファンドでどれぐらいの期間支援すべきか。更にそのファンドからの卒業の在り方、そしてファンドによる支援の打切りや減額の在り方、そしてそのモニタリング評価として、プロセスを問うのではなくて、できる限り結果責任を問う形にすべきではないかといったような論点をこちらでは書かせていただいております。

続いて、19ページ目、こちらは同じくその支援の在り方の内容でございますが、支援の金額の決め方ですとか、支援金の使途の範囲に関する論点でございます。金額につきましては、やはり外部資金の獲得実績などに応じてマッチングファンド的に支援額を決定すべきではないか。そして、その使途については大学の財務戦略に基づき、経営の自由裁量の下で適切に決定されることが必要。ただし、やはり当然、税金がベースになっているお金でございますので、その使途に係る境界条件、これについて何らか設定すべきではないか。

最後のポチ、これは閣議決定でもあるんですけれども、JSTの大学ファンド基金への大学からの資金拠出が求められておりますが、これと大学独自の基金の運用、この在り方の関係性について検討すべきではないかということで、論点とさせていただいております。

最後の20ページ目でございます。こちらは少し話が変わるんですが、世界と伍する研究大学への支援と博士課程学生支援との関係でございます。

博士課程学生支援ということで、令和2年度の3次補正において、JSTの創発事業に基金として200億円が載っております。

なお、こちらのファンドの一部を使って博士課程学生支援をやるということも決まっておりますが、その実際にどのくらいの規模なのかということにおきまして、三つ目のポチ、その際、ファンドの運用益からの支出は現在の事業を引き継ぐ形、先ほど申し上げました創発事業では200億円でございますけれども、当面の間は200億円程度規模の支援としてはどうかというふうに書かせていただいております。趣旨としては、例えばこの運用益が約3,000億の場合に、この博士課程学生支援の方が増えてしまいますと、当然世界と伍する研究大学の支援額というのは小さくなってしまいますので、それは本末転倒ではないかということで、このような記載としております。

「なお」のところでございますけれども、将来的には各大学の自主財源によって博士課程学生支援というものを求めていくことが必要ではないかということも論点として付させていただきます。

少し長くなりましたが、説明は以上でございます。

#### 【上山会長】

ありがとうございました。

それでは、これから今の我々の方の用意した資料に関しての討議に入りますが、これからほぼ95分ぐらいでございます。

その前に、僭越ですけれども、委員の方々にレクをしたときの反応は私の方に毎回上がってきますが、それを拝聴した上で、少し4点ほど申し上げておきたいなと思うことがあります。

まず一つは、今日から後半に正式に入るわけですが、この中はかなり、以前のどうあるべきか論から具体的な内容に入ってまいります。この何回かの専門調査会を通して、この委員の先生方の中でできる限りほぼ完全な形でコンセンサス、共通認識を得たいと思っているということです。

今回提示しましたように、研究力に関しては論文を使っておりますが、論文だけで測るべきではないという議論も当然ながらございます。ただ、それを一つの手掛かりとするということは、これだけではカバーできないものがあるということを知ってやるということと知らないで

やるということでは全然違うという意味で、そのことも踏まえて共通の認識を得たいと思うということです。

それから二つ目は、何人かの委員の方々から、全く異なるカテゴリーの中でのエッジの効いたものを選ぶべきではないかという声も上がっているということも理解をしております。ある種、既に何十年、100年と続いてきた我が国の高等教育行政の中で、出来上がってきている秩序をどこまで凌駕していくのかという問題ですが、例えばアメリカの場合ですと、シカゴ大学はロックフェラーのような民間の資金である程度大きく形を変えていきました。スタンフォード大学の場合は、フォード財団と、それから何よりも国防総省のお金が極めて多く入っている。それは従来高等教育行政の中では到底使うことができないような資金がそこに入って、新たな大学を作っていたという歴史があります。

そのことを考えますと、この資金というのはある意味で我々内閣府と文科省が差配している公的な資金の中で、裁量権のある資金を提供していくということですので、民間の財団がどこか選んでいくということとはちょっとなかなか合わないなど。その意味では、OISTを作られた方はとても頭が良かったなと思います。つまり、そういうような資金とは別枠で大学を作っていたということですね。そういうことも背景として、この資金の在り方を考えたいと思っております。

三つ目は、今日の研究力の指標で提示しましたように、できる限り透明性があって、見えやすい形での指標なり、あるいは分析を通して、できる限りそこに迫る、最終的なところに迫っていきたいと思うものの、最後は応募してくる大学のビジョンや長期的な可能性を考えて選んでいくということだと思っております。ですから、できる限りやっていますけれども、最後のところはエキスパートのジャッジなんだというふうに思っております。

最後は、そのような応募大学の一つ一つに対して、20年、30年の長期的なシナリオのシミュレーションを描きながら、それが果たして可能かどうかということを最終的な委員の方々に判断していくという方向性になるだろう、こういうふうに考えております。

それでは、早速でございますけれども、我々が提示をしましたような資料・論点に関しまして、委員の先生方からの御意見を頂きたいと思っております。どなたでも結構ですけれども、お手をお挙げください。よろしく願いを申し上げます。

安宅委員、どうぞよろしくお願いいたします。

【安宅委員】

ありがとうございます。

画期的によくなったと思います。というのは、ちょっと論理がひっくり返っているようにかねがね議論を持っていたまして、今、木が生えているところにただ水をあげて、砂漠は砂漠のままというタイプの議論をやっていたと思うんですね。僕はもともとこの10兆円基金の議論というのを投げ込ませてもらった人間ですけど、結局この国の研究開発能力というのが人レベルでも育てられず、優秀なFacultyにも逃げられ、つい先日、プリンストン大学の眞鍋先生がノーベル物理学賞を取られましたけど、国籍を移されているということが起こっていて、Junior facultyも逃げ、Senior Facultyも逃げ、新しい学問領域を満たす力も失いつつある。これをどうやって長期的にできるかという議論はやっているはずだったのに、今割と論文がいっぱい出ているところに、ただ金を流し込む、と。枯れかかっているところはもう枯らしてしまえというタイプの、凍傷になって、ただ心臓に血を送るみたいな全く違う議論になっていたと思うんで、そこが是正をされつつあるというふうに理解しました。なので、とても良かったと思います。

ただ、まだ落とし込めるというところで見えたときに、単純に論文数というのは、これ前も言いましたけども、これはFacultyの数、P I の数に非常に比例するので、ただそれだけで見るとというのは全く間違っていると思いますし、基本的にはやっぱりいい人を探って、いい仕事をして、いい人を育てるというサイクルを回すために、いい人の割合をしっかりと見なくてはいけないし、規模が大きい大学はただ優遇されるみたいな、訳の分からない話があってはいけず、しかもちゃんとそこは今、枯れかかっているけど、こういうふうにやっていったらちゃんと育って行って、この国全体として豊かになっていく、すばらしい強さになるという形に持っていけるかという議論につながっているかという、まだ単純に今の規模議論が抜け切っていないので、そこはすごく重要だと思います。

大学一個一個で総合的に全部、みたいな話はもう本末転倒であって、前も少し議論になりましたけど、やっぱりハーバード大学というのはライフサイエンスが強い、プリンストン大学というのは数学だとか物理学が強い、シカゴ大学だったら経済学や数学が強いみたいな話で、そういうふうに強みを持ってこうやって育ててきているんであって、アメリカの歴史の中では、比較的新興大学のシカゴ大学なりスタンフォード大学がどうしてあそこまですばらしい大学になるかというのは、非常に戦略的に強みを作ってきたからであって、そのための議論がちゃんとハイライトしているのはとてもいいなと思いました。

ということで、目的に即して書いてあった四つ、大学のResearch universityとしての育成、

Ph.Dの育成、Ph.Dの育成能力がない大学、あるいは育成能力がない社会というのは、もう基本的に弱い社会であって、ちゃんとJunior facultyが集まってきて育てられる、世界中から学問領域がまた生み出されて、そこにつながるようなところにちゃんと入るといのはめっちゃくちゃ重要だと思います。そういう視点で見ると、そこがどうやって織り込まれるかがまだ足りていないところは一回考える必要があると思うんですが、冒頭のところは非常に全面的に賛成です。

以上です。

**【上山会長】**

もともとそうだったんですが、議論の過程でフォーカスをする点が見えてくると、もともとの議論が見えにくくなったにすぎないのであって、もともとそういうことなんです。それを御理解いただければ。

**【安宅委員】**

ありがとうございます。もともとに戻っていただいて大変有り難く思います。

**【上山会長】**

今おっしゃってくださったように、強みのある分野の大学、これを国が指定するわけにはいかないで、当然ながらそれぞれの大学の戦略の中で何年かしていくうちに強みのある分野が出てくる。そして、そこに行く人たちにとっては多様な選択肢が増えていく、そういうことなんだと思います。その基盤をシナリオとして作っていくということだというふうに理解しております。ありがとうございます。よろしいですか。

**【安宅委員】**

作るのは、サポートも入るのかなと今理解しました。

**【上山会長】**

ありがとうございます。是非ともよろしくお願いします。

それでは、村山委員、どうぞよろしくお願ひいたします。

## 【村山委員】

非常に具体的な話になって、すごくいいとは思っているんですけども、先ほど上山会長が言われたことで一つ気になったのは「基本的にやっぱり税金でやっているの、できることは限られている」というお言葉があったんですけども、それはすごく心配しています。つまり、今まで運営費交付金で世界に伍する大学ができなかった。それを超えて世界に伍する大学を作るためにやっているお金だというふうに私は思って参加していたので、かなり思い切ったお金の使い方ができないと逆に意味がないという心配をしています。

ですから、今まで大学の執行部と話をしていると、例えばこういうことをやったらどうかと言うと、それは確かにルール上駄目とは書いてないけれども、こういうことをやったら批判を受けそうだからやらない、やっていいと言われてないことはやらない、というのが、今の大学の、ある意味で憶病な状況だと思うんですね。積極的にこれをやれ、やっていいというふうに言わないと、思い切ったことができないという現状があるので、そういうことを実現するようなシステムをやっぱり作っていかないと、幾らいい大学を選んでこれを改革しろといっても、変わらないとすごく心配を感じています。

ですから、私の個人的な経験では、例えばWPIというプログラムで東大に研究所を作りまして、外国人の研究者を雇うときに非常に有り難かったのは、子女教育のお金を付けていい。アメリカの大学というのは、大抵年間400万円、500万円掛かるわけですけども、大学の教員が子供を大学に行かせるときになると、所属する大学が給料に400万円、500万円、手当を上乗せするんですね。そういうことをすることによって、大学の教員がここに来てよかったと思うという環境を作っていくということがありまして、その類いのことを積極的にやっていい、WPIはやっていいと書いてあったんですよ。それで実際にそういうことをやることによって、イエール大学の有名な数学者を採用することができたりとかしたので、政府の側からこういうことはやってもいいんだということはかなりエクспリシットに示した上でこのシステムを作るということをやらないと、最終的に何も変わらないんじゃないかという心配をすごくしています。

ですから、何を言いたいかという、各大学の提案を審査するときに、その各大学の持っているポテンシャルをすごく評価して、論文数があってどうのこうのというのももちろん大事なんですけれども、それ以上に今までできなかったこういう野心的なことをやりたいという、そういうビジョンが提示されていて、その提示されたビジョンに対して文科省とか国が、じゃそれやっていいよということ積極的に書くという、その相互からの仕組みを作ることによって

最終的に改革ができるというような、そういう形を作ってほしいというふうに非常に思っています。

さっきの発言でちょっと心配になったので、すみません、一言言いました。

**【上山会長】**

今のことに答えをすると、全くそんなことはないです。なぜかというと、正に今、村山委員がおっしゃったようなことをエンカレッジするためにこの資金を作っているわけです。

ただ、税金というものの使い方に関しては、非常に難しいものがあることは事実です。今回、我々はマッチングファンドの考え方を入れていますけども、当然ながらその資金が入るに応じて自らが稼いでいる資金というのがあるわけですね。その部分に関して、どのような使い方をしても誰も文句を言うはずがないわけです。あるいはこういうふうに使うべきだと、エンカレッジすることもできるわけですね。

**【村山委員】**

だって、今までそうじゃなかったですよ。大学が寄附で集めたお金も文科省の縛りの中で、例えば飲食に使っちゃいけないという縛りがかつてはあったので。

**【上山会長】**

ですから、今回はきちんと規制改革といいますか、会計基準を変える形で、国立大学の資金の仕方に関しての縛りを取っていくということが付設しているわけですね。

この資金が公的な資金であったとしても、その資金から直接に、例えば子女の教育に出すか、ここは分からないです、正直言えば。

**【村山委員】**

WP Iはできたんですよ、税金で。

**【上山会長】**

それはちょっと議論の対象にまだ詰めていません。だけど、そういうことができるというためには、財務基盤を変えていかないといけないというのはこの資金の趣旨ですから、そのためにマッチングファンドという考え方を入れているということです。

村山委員がおっしゃるように、この税金で何でもできるんだ、とそこまで書けるかどうかはちょっとまだ分らないです、正直言って。なぜかという、様々な批判がありますから。

**【村山委員】**

何でもと言っているんじゃないですよ。これはできますということを提示しないと、大学はやらないんですよ、残念ながら。

**【上山会長】**

それはやっていきたいと思います。ですから、考えている方向は全く同じだということをお答えしておきます。

それでは、次は篠原委員、どうぞ。

**【篠原委員】**

ありがとうございます。

上山会長のご発言の確認も含めてですが、定量的かつ客観的な物差しで選ぶというようなことがやはり必要なのだろうと思います。そのような観点から、そのTop10%論文数というものを、足切りという言葉は使われていませんが、選定の足切りに使うことを100%否定するものではないと私は考えています。

ただ一方で、従来から現在までの延長線上の活動で、世界に伍する大学ができるのかということ、おそらくできないからここでやろうとしているわけです。ということは、言葉を返すと、今の研究力だけで評価しても駄目なわけです。今の研究力で評価してできるのだったら、従来の延長線上でできるということになってしまいますので、そのような観点からも、現在の研究力だけでは駄目で、ビジョンとかガバナンスというものを大切に見ていく必要があると思っています。

従来の延長線上だと、やはりここはこういう人がいるからという議論になるのですが、今回のこのファンドを使って良い環境を作れば、人材を集めることができるはずですし、人材流動が積極的に進むことも前提に考えるべきだと思います。

そういうことを考えると、少し具体的なことを言いますが、さきほど御紹介されたTop10論文数による足切りライン、この足切りラインというのはなるべく低めに設定した方がいいのではないかと考えています。それを高めに設定してしまうと、最初から今の研究力しかないよう



な形になってしまいますので、この足切りラインはなるべく低めに設定して、その後に優れたビジョンとか、戦略性とか、意欲的なガバナンスを目指す大学を取りこぼすことのないようにしなければいけないと思っています。

もちろん、これをやるためには選ぶ側にも覚悟が必要なのですが、おそらく、今回の施策は手を挙げる側にも覚悟を求めているはずで、ですから、手を挙げる側にも覚悟を求めている以上は、定性的な在り方をしなければいけないという、非常に大変ですが選ぶ側も覚悟を持たなければいけないと思っていました。

だから、私のメッセージは、Top10%論文数みたいなことを使うことは問題ないけども、そこでの足切りはなるべく低くして、そうではない定性的な部分でもっともっというろんなバリエーションを選べるようにした方がいいのではないかとということです。

以上です。

#### 【上山会長】

ありがとうございます。

足切りという言葉は使いません。使いたくないですが、考慮すべき事項ということに、この研究力みたいなことを入れていくという。

考慮すべきラインを低めに設定するというご指摘ですが、これは今でも相当低めに設定をしようとしています。これを超えないと、幾ら何でも世界に伍するとは言えないんじゃないかというところでラインを設定しようとは考えているところなんです。

#### 【篠原委員】

我々の今までの議論もそうですが、今回、世界に伍するにたどり着けるかどうかというのは、やはり今までとどれだけ違う考え方を持ち込むかということだと私は思います。だから、そういう観点でどれだけアグレッシブにビジョンとか、ガバナンスみたいなことを考えていけるかということの方が問われるような気がいたします。

#### 【上山会長】

全くそのとおりです。そのところを最終的には判断していく。つまり、それはそれを選ぶ側の責務がそこにかなり重要なものとして発生するということは全く同意見でございます。

ですから、そのところを全く軽んじているわけではございません。それぞれの大学の応募

資料、応募提案に基づいて判断していくということになるんだろうというふうに思っております。

川合委員、どうぞ。

#### 【川合委員】

ありがとうございます。

だんだんまとまってきているので、この延長上に何かいいことがちゃんと設定できることに期待はしています。

一番の心配は、世界と伍する大学というものの定義が実は余り明確ではなくて、要するに成果としてどこまでできましたか、というのを10年後、20年後にどうやって私たちは確認するのか。これが相変わらずよく分からないところが大変問題だと思っております。

大学ランキングで上げることが最終目的であれば、やるべきことはかなり明確なんですけど、それで本当に教育をして、いい人材を出してくるって、本来の大学の在り方がきちっと測れるのかどうかというのが非常に心配しています。今のところ、何か研究、研究といって、研究大学であることは大事なので、その指標は当然ないといけないと思うんですけど、やっぱり人を輩出するという、そこが大学の大事なミッションなので、何か選考するときにも、どれだけの人材輩出ができていくかという実績も、何らかの形で透明な指標として入れていただくのがいいかなと思っております。

例えば、政治の世界なんか見ていると、早稲田出身の方がたくさんいたりするわけで、それぞれ得意な分野という言い方をすると、今の研究だけではない指標がもう一つ必要かなと思っています。

それから、さっき村山委員のご懸念に関しての私のコメントですが、理化学研究所でも子女教育にお金を付けることはできる部分がありました。これは手当を付けるということが出来るシステムになっていけばできるんですけど、いわゆる承継ポストの今の公務員のラインのところは手当が付けられない制度がよくあるんですね。その仕分ができればできるはずで。だから、例えばここに手を挙げる大学は、今までの公務員制度の人事をやめてしまうと。それでやっつけられるかどうかは別ですが。

そういった思い切った制度改革を内在させることで多分実現できる可能性もあるんじゃないかなと思っています。それは多分、大学に配られている運営費交付金のお金の縛りから生じていることなので、どこかで開放できる可能性はあると信じています。現実的には別のお金で雇

えばできるはずなので、スイッチすればできるんじゃないかなとちょっと思っています。WPIでできたのはそういう理由だと思います。

#### 【村山委員】

そういう提案を持ってくる大学を援助するんですね。

#### 【上山会長】

ありがとうございます。もちろん、研究以外の教育の人材輩出も含めて、様々な指標があり得ると思うんですね。それは今後もこういう、いいインデックスを考えていくということはあると思います。これは別にこの大学ファンドのみならず、CSTIでやってきても、この類いの議論は何を指標として使えばいいのかというのはみんな困っている。それを手探りでやっているということだと思います。それは各大学も同じだと思うんですね、大学経営の中において。

ですから、それを今後もできる限り反映していきたい、これは当然ながら思っている。なぜかということ、研究だけで見られないのが大学だからというのが、ほぼこのコンセンサスがあると思います。

もう一つの公務員うんぬんの話は、今回大学ファンドで選ばれるところというのは、恐らくは従来の運営費交付金の額は変わらないと思いますけども、パーセンテージがだんだん減っていくんだろうと思います。なぜかということ、母体が大きくなっていきますので。

そのときに、この特定研究大学というのが従来の国立大学と同じカテゴリーとして考えられるのかなという気はします。恐らく、しかしながらそれは時間の掛かる話だろうと思います。一気にということじゃないと思います。そのときに今、川合委員がおっしゃったような、ある種の公務員としての縛りの話がもう少し明示的に出てくるのかなと、こういう気がいたします。そのための会計制度も全く異なる形でやろうと我々の方では考えていますので、そういうラインに乗っていくんじゃないかなと、そういうふうに想像はしております。

次は金丸委員、どうぞ。

#### 【金丸委員】

ありがとうございます。

いつも同じことを言って恐縮なんですけど、8ページの絵がありますよね。これは事前レクするときにも申し上げたんですけど、この世界と伍する研究大学を作る目的が、例えばグローバル

社会の変革を牽引するんだったら、グローバル社会を牽引するようなグローバル大学にそのファンドの運用益を渡せばいいんじゃないかということに取られかねないんじゃないかと思っています。日本の富の創造に貢献するという言葉とかイメージが出てこないで、でもそれは尖がった研究をして、世界と伍する研究論文を出せば、おのずから日本の国の富も創造するはずであるというストーリーなのか。

お聞きしたところ、この絵は過去のいろんな閣議決定等の資料に登場している絵なので、これを変えられないとすると、今回まとめてくださった5ページで、基本的にさっき上山会長がおっしゃられたマッチングファンドというイメージも、今回の大学ファンドの運用益をつぎ込むことをきっかけに、この再投資のサイクルが健全に回っていくということなんですけれども、もっとこの再投資のイメージのところをクリアにしていくと、この左上から右下に矢印があって、現在の社会構造から次代の社会構造とありますけど、これがちょっと曖昧なので、基本的にこの矢印の先が民間企業における新事業が生まれるような人材とか研究成果を提供する、あるいは研究者で大学に残る人と、卒業生の人たちは起業して、母校にキャピタルゲインを出資してもらって、それで還元していくということなんではないでしょうか。

次代の社会構造へというところに日本の富を創造するイメージを書けば、先ほど私が冒頭問題を指摘したことが解決できるんじゃないかと思いますので、上山先生は頭の中にトータルなデザインが入ってらっしゃるので、是非起業家の輩出とか、新しい新事業の創出とか、そういうのがどこかに出てくるといいんじゃないかと思いました。

それから、このページの右下なんですけども、表現を変えた方がいいと思うのは、この「土壌に水を撒く」というのはいい表現には見えない。これは生物学的に、土壌は豊かだけど水はできる限り最小限がいいというのは、ワインの勉強をすると必ず出てくる話なので、僕はあえてこんな表現をここに入れることはなくて、要するにポテンシャルティーを信頼して、そのポテンシャルティーを引き出すためにどういう政策を取るか、支援をするかという普通の表現で、この比喩は不要かなと思いましたので、できれば改善していただきたいと思いました。

それから、一番最後の3%成長という話が出てくるんですけども、その3%の成長というのはどういうものを意味しているのかがちょっとまだ不消化なので、補足説明してほしいです。今回のファンドの対象になるような大学は、ガバナンスも変わり、民間企業並みの会計基準が導入されると思うんですけど、この3%というのは企業の経営でいうと、売上げに関わるのか、それかキャッシュフローのことを言っているのか、BSの残高を言うのか。一体どういう構成によってその3%というのがイメージされているのかと、最後は質問です。よろしくお願

ます。

以上です。

**【上山会長】**

レクの資料を頂いてすごく難しいなと思ったのは、今の御指摘の一つの日本の富を創造する仕掛けにもなり得るといふ表現を入れるべきだといふ。これ、とても私としては納得感があります。それはすなわちベンチャーも含めたイノベーションのエコシステムを回す拠点として大学が社会の中で、文字どおり我が国における富を活性化させていくといふ方向、そのことは全く同意をしております。

この日本の富とまで書くのかといふことも、ちょっとどうかな、分かりません、正直言つて。まだ悩んでいるところです。

**【金丸委員】**

我が国の発展、でもいいですよ。

**【上山会長】**

そうですね。少し突き刺さっている問題なので考えてみたいです。

**【金丸委員】**

先ほど話に出たペンタゴンがスタンフォード大学にお金をつぎ込むのは、国防のための予算、国民の税金を使うわけで、ほかの大学にそれをつぎ込むわけじゃない。でも、今回のこのペーパーを見ると、すごくビューティフル過ぎて、何か世界貢献するんだ、と言っているんですけども、では日本の未来は一体どうなんだといふ話になってしまう。世界貢献を前面に出してしまうと、スタンフォード大学にやっぱり寄附した方がいいんじゃないと言われかねないですといふような気がします。

**【上山会長】**

気持ちとしては全く同じです。美し過ぎると言われると……

**【金丸委員】**

いや、美し過ぎるのと、「卓越した」ぐらいはスーパー何とかというのもそうかなと思うんですが、「世界を凌駕する」というのはちょっと言い過ぎかと。多分、大谷が自分で世界を凌駕するようになりたいというキャッチフレーズを自分で掲げてなかったんじゃないかなと思います。とはいえ、それは過去のペーパーへの表現なので、しようがないと思うので、いろいろなペーパーの中で、私が申し上げたようなことをうまく組み入れていただけるといいなと思います。

### 【上山会長】

そうですね。最終的な文言に落とし込めるときに、いろんな形で、いろんな人がいろんなことを言ってくると思うんですね。そここのところとも折り合いを付けながら、今、金丸委員がおっしゃったようなことをできる限り反映したいというふうに思います。我が国の成長、あるいは富という言葉も考えさせていただく。同時にありました「土壌に水を撒く」というのは、ちょっとこれは御指摘のとおりだというふうに思いました。

あと3%ですが、これは純粋にキャッシュフローの収入です。なぜかといいますと、恐らくは3%じゃ足りないんだろうと思いますが、現状の大学から生まれてくるのは、いきなり、例えばスタンフォード大学なんか大体7%ぐらい、あるいは大きな研究大学はそれぐらいで伸びているわけですが、そこまで書き込めるかという判断と難しいかなという判断であって、内容としては今申し上げた話に、純粋に財務基盤としてのキャッシュフローが入ってくるということを考えているところでございます。

その次は、菅委員、どうぞよろしく申し上げます。

### 【菅委員】

ありがとうございます。

皆さん、多分同じことを大体考えていらっしゃると思うんですけども、Top 1%、10%論文数というのは、ある意味フィルターだと思いますので、それは置いておいて、大体8ページに書かれている長期成長を前提とした大学経営の維持・発展というところが一番のセレクションの目安になるのかなと思います。

ある意味エクスキューズですけれども、日本の大学は運営費交付金がずっと減らされ続けてきて、それでぎりぎり自分たちは維持している。結局、世界的に見ると維持していることは下

に下がっていくということだったと思うんですが、それをこのファンドでもって右肩上がり  
にどうやってするかというのを考えるのが、ここに手を挙げる各大学の一番のミッションだと思  
います。成長を可能にするガバナンスというのは恐らく一番重要な部分で、そのガバナンスの  
下で恐らくエマージングテクノロジーという、もう今、発展し切っている技術ではなくて、こ  
れから出てくる技術にいかにか投資をしていくかということをも可能にするファンドというふうに  
私は理解していますので、この部分をもう少し前面に出していただく書類にさせていただいた方  
が、きっとほかの人に伝わりやすいのかなというふうに考えました。ですので、そこら辺を少  
し、もうちょっと本当前面に、一番最初の方にできるだけ出していただいて、何を目指してい  
るかというのをクリアにさせていただく。

それから、世界と伍するというのであれば、ちょっとまた別視点ですけども、ランキングと  
いうのはやっぱり最適どころも非常に重要視されているので、相変わらず学部は全部日本語  
でやらないと授業は駄目ですみたいなことを言っていると、いつまでたってもその部分は向  
上しないのかなという気がしますので、その辺も含めた世界と伍する大学になるような、やっ  
ぱり目標、こういうことを要求しています、というのをもうちょっと前面に出していただいた  
方がいいのかなと思いました。

以上です。

#### 【上山会長】

ありがとうございます。

この8ページのところでいうと、研究の土壌やポテンシャルを引き出すというところに、も  
う少し具体的に、戦略的な、それぞれの大学の領域の問題、エマージングテクノロジー、フォー  
カスするようなもの、というものも求めるようなものにしてほしい、こういう御要望ですよ  
ね。これはちょっと考えさせていただきます。もっともなことだと思しますので。こうやって  
最終的なところまで少しずつ鍛えていきたいと思っております。ありがとうございました。

では、次は白石委員、どうぞ、お願いします。

#### 【白石委員】

どうもありがとうございます。

もう既に全てほかの委員の先生方が言われたことですけども、私としてもこういう点は非常  
に重要だと思います、賛成しますという意味で3点申し上げますと、一つはこれ、安宅委員が

一番最初に言われた、結局最終的に大事なのはいい人を探って、いい仕事をしてもらって、いい人を育てる。そういう大学を作ることでしょう。これはもう本当にそのとおりなんです。

もちろん、インブリーディングを抑制的にということは、ビジョンの中に入っているんですけども、実は私自身、今、教育大学の方にいまして痛感しますことは、結局、学部のレベルでこの大学に入るかで、日本ってほとんど人生が決まっちゃう。このシステムというのは、かつては効率が良かったけども、やっぱりある意味では、今になってみると非常に問題の多いシステムだと思っております。ですから、インブリーディングを抑制的にという、表現としてはこういう表現なのかもしれないですけども、その意味内容というのはもったきちっと共通理解を作っておいた方がいいんじゃないでしょうか。これが第1点目です。

それから、2番目にそれに関連して、これは安宅委員が言っておられた点で、それぞれにやっぱり特徴のあるとか、強みのある大学を作らなきゃ駄目だ。これは前にも少し議論があって、私はかなり広い合意があると思いますけども、金太郎あめみたいな総合大学をまた強化するという意味じゃないんだということから言いますと、先ほどエマージングテクノロジーみたいなものはやっぱりもっと強調されてしかるべきじゃないかというのは、私はもう正にそのとおりだと思います。

それから、3番目に、これちょっと私、心配している点ですけども、例えば日本のGDPはイギリスよりも多いので、イギリスで3、4校だったら日本は5校から7校ぐらいじゃないかという、こういうまず数字ありきはやめた方がいいと思います。

実際問題として、国際比較という点で、やっぱり私も決してTop10%論文数で研究力が全部判断できる、そんな単純な世界だとは思っておりませんが、それにしても何かまず最初に5校から7校という数字があって、そのためには何か下駄を履かせた方がいいなとか、そういう、あるいは指定国立大学法人制度みたいになるんだしたら、それはもうやめた方がいいんで、ここの数字のところは、これは数字ありきじゃないということは、是非どこかにきちっと書いておいていただいた方がいいのかなという気もいたします。それだけです。

#### 【上山会長】

ありがとうございます。

恐らくここにおられる先生方はほぼ合意していると思うんですが、18歳のときの偏差値で行く大学が決まるみたいなものではなく、やっぱりその大学の特色、研究と教育の特色に応じて多様な選択肢が目の前にあるという、そういう秩序を作っていくべきだなと思っております。



その意味では、この大学ファンドがそのきっかけになればいいなと思っております。それは先ほどおっしゃったみたいに、エマージングテクノロジー、特色のあるテクノロジーがあるから、それに応じて大学間の人々の移動が生まれていくという、競争力のある大学はほぼ同じレンジで競争しているということなんだと思います。

そういう大学ですし、そういうことを考えると数字で測るなんていうことにはならないのが本来の世界で、しかしながら便宜的にどういう大学を対象とするかと考えるときの一つの資料としては問題がない程度にまで資料だけは整えていこう、こういうふうを考えているというところで、おっしゃるように、これが全てではないということをごどこかで強調した方がいいかもしれません。ありがとうございます。

それでは、次は富山委員、どうぞ。

#### 【富山委員】

ありがとうございます。まず、委員の皆さんとかぶらないところだけ申し上げます。

これ、今日の現状の学術的実績というのは、確かにストレートにちょっとやっぱり足切り基準にしかないので、そういうことで私はいいんだろうなと実はある意味で整理していますが、結局これは前から申し上げているように、将来、芽のありそうな大学に、今、30年ぐらいの差を付けられちゃったけど、その30年のビハインド分の、ある種かなりベンチャー的なリスク投資をガンと入れましょうということを議論しているわけですから。

じゃ、それを何に使うかといったら、これも皆さんが言われたように、多分、圧倒的に人に使うんですね。日本国内はもとより世界中からベスト・アンド・ブライテストを、特に若い人達を捕まえてきて、かつ来てもらえるような環境を整備して、これは費用を研究分野に含めてというようなトランスフォーメーションをするかしないか。

恐らく、今どきの若い野心的な世界を変えちゃおうなんて思っているやつは、放っておいたらベンチャーやりますよ、それがベストであれば。だから、必然的にそういう人が集まってくれば、さっき金丸委員が言われたような展開になると思うんですね。

そうすると結局、それをどうできますかということになると、恐らく一番勝負になるのは、さっきの3要因で言っちゃうと、今後の成長戦略、成長ビジョンの問題と、それを実現するガバナンスと人材ということになると思うので、結局、実はこの3要素の中でいうと、やっぱり残りの2要素というのが本当に、最後のどこに金出すんだということの決め手になると思います。

ただ、ここが一番肝腎で、私が東京大学も含めて、何となく対応状況みたいなことを聞いている限り、特に2点目と3点目について伝統的、競争的資金的なノリに早くもなりつつあるので。ここはもう既に村山委員が認識され、一番懸念されていて、内部で腐心されているとは思いますが、これは本当100万回ぐらい言わないと、向こうがそういう反応をされちゃうと、いつまでたってもエクイティストーリーにならない、いつまでもお金出さなくなっちゃうんで、もうここは先走って議論しちゃいますけど、この会議としてもそのメッセージを出していった方がいいし、そこは相当働き掛けをしないと、とにかくよくある紙を出してくると思うので、そこは是非お願いしたい。

あと、幾つか制約の議論がありました。私が知る限り、仮に現状においても、もし人を探る、要するに本当にベスト・アンド・ブライテストの若い人を世界中から引っ張ってくるということであれば、金があればできます、今なんて。実際に前にも御案内したかもしれませんが、東京大学経済学部が今、星先生を始めとして、小島先生を採って、今度またもう1人採ってきます、きっと、シンガポールから。金があればできるんですよ。

じゃ、何でやらないかといったら、それはさっき少し村山委員が言われましたが、ある種の自主規制みたいな力が働いていて、それは外なのか内なのか分からないけれども「そんなことやったらとんでもないことになる」みたいなことを言う人がいるわけですね。あるいはそう思ったりするから、そういう自主規制を働かせていますが、東京大学で星先生をすごい高い給料で取ってきたからって、何も起きてないですよ。

星先生が来たから小島先生が来ているという展開になっているんで、そうすると問題は、そういう大変なことが起きるといことでびびらないような学長を選んでいるか、あるいはそういう学部長を選んでいるかというのは、やっぱりこれガバナンスの問題に結局収れんするんで、そこはくどいようですけども、この先、一番僕は勝負だと思うんで、私ももちろんまた同じようなことを言いますが、是非とも上山会長、頑張ってください。

#### 【上山会長】

ありがとうございます。

人に投資というのが最大だと思うんですね。結局は人で決まるので、制度的な意味でそれができるような体制を作っていくかというのがこの大学ファンドの主たる目的で、恐らく環境がなければいい人だって来ませんから、仮に給料だけではなくて、そういったことの意味でもお金が使えるということなんだとは思っております。

それから、最終的にそれぞれの大学がどういう提案になるか分かりませんが、漏れ聞くと  
ころによると、やはり長い間補助金の世界に慣れていますので、そういうことにならないため  
にも、やっぱりこれも公開でやって、海外の人を呼んで、ということはずっと丁寧にやってき  
ているのは、そういうメッセージがなるだけ伝わるようにという思いでやってきているという  
ことでありますし、そして結局はガバナンスというか、内部の中の強い決意で執行部が何でも  
できる体制ということを作る。そのためには恐らくその方々の手に裁量権のある資金がなけれ  
ばできないだろうという気持ちでこのファンドの側面を見ているというふうにお答えさせてい  
たきます。ありがとうございます。

それでは、次は遠藤委員、どうぞ。

#### 【遠藤委員】

各委員の方々がおっしゃられているところ、非常に同意をいたします。

川合委員がおっしゃっておられたんですが、世界と伍する研究大学、非常に重たい言葉なの  
で、例えば応募しようと思う大学からすると、やっぱり意味の多様性とか解釈の柔軟性、そう  
いうものがある形容詞がちりばめられているので、前回イェール大学の先生からのヒアリング  
だと思うんですが、中国の場合は世界Top10大学に入るといような明確な戦略を出して、そ  
れで戦術を考えていくということだったと思うんですけども、じゃ日本はどうしたらいいのと。  
COEはどうだったの、指定国立大学法人制度はどうだったの、という思いは、やっぱりどう  
してももたげてくると思います。

ですので、論文の評価等に対して、一方で大学選定のときにビジョンを評価するということが  
あると思うんですが、それはもう極めて具体的な事業計画、投資計画によるものであってほ  
しいということは私の言葉からもあえて言わせていただきたいというふうに思っております。

その選定の際には、白石委員もおっしゃっておられたり、富山委員もおっしゃっておられま  
したが、別に総合とか融合とかということだけではなくても、やっぱり突出した学部だったり  
学科だったり、人材だったり、そういった人たちを中心としたような選考みたいなものもやっ  
ぱり考慮していく必要があるんだろうなど、それがあつ種、今までの大学への資金の分配と違  
う形になっていくんだろうというふうに思います。

もう1点なんですが、税金を使うという意味合い。最初に、上山会長がおっしゃっておられ  
たことなんですけれども、金丸委員も、じゃこれボランティアなのかというふうにおっしゃっ  
ておられたのですが、税金を使うという意味合いを定義すると、やっぱり国益に帰するという

ことでないといけないんだと思っています。

大学の自立性というのは十分に担保されるべきものだと考える一方で、例えば、資金が来たときに別会計でしっかり管理されることができれば、極端かもしれないですけども、例えばこれまで手を出しにくかった安心・安全に関する資金の受皿であるとか、そういった国の方向性と合うような研究の領域をしっかりと作っていくということも一つの手なのかもしれません。

あと、P h . Dの育成ということも国益に帰するんですが、特に今、非常に国際的に負けている国際機関へ送り出す人材のための公務員教育、公務員にP h . Dを取らせるとか、社会人にもう一度取らせるとか、そういったような国際機関を意識したような教育があってしかるべきなんだろうと思っています。

税金を使うからできないことというのも、やっぱり気を付けなければならないことというのはたくさんあると思いますので、そこは今回の国立大学法人法の改正というのは非常に重要。これはマインドの問題なので、改めていっていただかないといけないと思うんですが、裁量性を増やしていくということを制度的に担保して、先の自主規制みたいなものが改める、それを法律でちゃんと担保してあげることが重要だろうと思います。

こういうことの基盤としてなんですけれども、これも本当に重ね重ね同じことを言って申し訳ないのですが、税金を使うということで、特定研究大学については、やっぱり自分たちのインテグリティの更新については自己計画を提出させるべきだというふうに私は思います。

それはもちろん自由であって構わないと思うのですが、我々の独自の、自分たちはこういうルールを作るんだというような、一つの何か自主規制みたいなもの、そういうものをやっぱり提出してもらい必要があるのではないかと、繰り返しになって恐縮でございますが、思っております。

以上です。

#### 【上山会長】

ありがとうございます。

こうやって大学を選ぶときに、もちろんですけども、ある程度決め打ちではない、多様な中でビジョンを選んでいくとなると様々な意見が出てくると思いますので、もう少し基軸を、という話だと思います。そこは、例えばTop10%、10位に入るみたいなことまで入れるのは難しいかもしれませんが、やっぱり言葉としては、突出した人材を作って、多様な分野で世界

とほぼ明確に競争しているようなところ、ということだと思います。

今回出した別紙は、我が国と諸外国との間の競争力の違いが余り見えなくしてはいますが、もう少し一目で見て、やっぱりこれはどう考えても世界と伍する大学になるべきだ、というような国論を喚起していきたいなと思っております。

それから多分、遠藤委員がずっとおっしゃっているインテグリティの問題、つまり国益の問題ですけども、これは当然ながら考えてはおります。これを明示的に計画の中に入れるべきかは、我々CSTIの方でもインテグリティとかセキュリティークリアランスの問題は詰めておりますが、例えば従来の利益相反のガイドラインのようなどころまでいっているわけではございません。そこが程度きれいになってきたときには、そういうことも明示的に公にできるのかもしれない。

利益相反のガイドラインが出来上がるには、相当紆余曲折がございました。これはアメリカにおいてもそうですし、我が国においてもそうですので、それに近いような作業を積み重ねていっているという段階です。

ですから、この大学ファンドに関して、そこまで、これこれのガイドラインに沿ってこれこれのものを出世というぐらいまで、できるかどうかはちょっと正直自信がございません。ただ、そういうところは着実にやっていっているということを御理解いただければと思います。

次は小林委員、どうぞ。

#### 【小林委員】

大分、同じことを繰り返して議論しているなというのが今日の印象なんですけれども、上山会長が大変に忍耐強く議論をここまで持ってこられて、本当に敬意を表したいなというのがまず最大の感想でございます。

当然、非常に高邁な理想と思想、あるいはコンセプトを制度に盛り込む必要性和、やっぱり時間が限られている中で、最終的に6校か10校か、2、3校かは知りませんが、具体的に支援対象の大学を絞り込む必要性もあるという議論の中で、大分コンセンサスを得られつつあるんだと思います。

ただ、私はやっぱり学問というのは、結局個人の能力をどう引き出すかということに行き着くんだと思います。米国のプロ野球とか、東京オリパラで日本の若者がかなり結果を出した要因というのは一体何なのかなと考えると、確かに日本の経済社会システムは30年遅れなのかもしれないけれども、スポーツの世界は大分前に後進性に気付いて、かなりお金を比較優位なス

スポーツクラブなり公的セクターにつき込むことによって結果が早めに出てきたということなのかと思います。もしそうだとしたら、一つの参考になると同時に、まだまだ研究の世界でもリターンマッチを期待できるのかなとも思うんです。

けれども、スポーツにおける集団からの有望株の選別のやり方と比較して考えると、先ほど示されたTop10%論文数とか論文の領域という選別ツールというのは、それらのほかにパンチ力のある基準のようなものがないとしたらある程度仕方ないのかもしれないけれども、結果として既存の指定国立大学法人制度と似たような基準を今回もまたリストアップしたにすぎないという結果にもなりかねないのではないのでしょうか。

それではやっぱりなかなか納得性が得られないとすれば、これももう何回も議論していますが、やっぱり今後21世紀半ばから22世紀に向かってどういうポテンシャルティがあるのかという観点。それと幾ら合議体方式、取締役会的なものの下で大学に自主性を持たせるといっても、この制度は当然政府の支援を得てやることになりますから、ちょうど岸田政権が正に打ち出している経済安全保障なり、あるいは新しい資本主義というような形の、国家戦略そのものとの整合性。そういうバランスというのが重要になるわけです。加えて、自然科学的な部分に限ることなく、やっぱり社会科学とか総合知とかいう部分をもう少し前に出す必要もあると思います。

一方で、これも前回言いましたけど、民間企業ですと総合化学とか、総合電機とか総合商社というのは時価総額が相対的に低い、極めて企業価値の低いものだと見られているわけで、そういう意味で複数事業間のシナジーというのは投資家からほとんど評価されていない。でも、研究の場になると、やっぱり総合大学が相対的に有利で単科大学というのはかなりのハンディキャップを持っていると見えるデータもあるわけですけど、もう少し狭い領域の深いシナジーというものをどう記述するか、どう定量的に把握するかという課題もあるんだと思います。エマージングテクノロジーは文字どおりインターディシプリナリーというか、正に境界領域から出てくるのだとしたら、こういうシナジーの議論、本当に意味があるシナジーの探究、分析というプロセスがもう少しあってもしかるべきではないかな、そんな気がします。

以上でございます。

#### 【上山会長】

まず、ここまでずっとやってきましたが、私というより、井上審議官、合田審議官、お二人が引っ張ってくださって、うちの大学ファンドの事務局の人たちの努力の集積で、私はそこで

見ているだけということなので、本当にそれは大変個人的に感謝しております。特にプロジェクトを担当している女性職員は大変すばらしいです。そういう意味では事務局の方々が大変やってくださっていた。

ただ、今おっしゃってくださった中で、間違いなく資金を入れたら伸びることはもう絶対だと思いますね。ですから、今回の10兆円というのはもう最大のチャンスがアカデミアに訪れているということは間違いない。これは10年たてば、この形でやっていけば、今、小林委員がおっしゃったみたいな、スポーツで起こったようなことが起こり得る可能性があるというふうには、ほぼ確信をしております。

それから、総合知の問題、今CSTIの中でも相当議論をしておりますが、今お言葉にあった狭い領域でのシナジーというのは、なかなかちょっと新しいフレーズで、決してそんな大きな総合というよりは、それぞれの隣接の部分における総合的なつながりをどういう形で作っていくのかという、そういう話は実際に例えば海外の、たしかコーネル大学だったと思いますが、人を採用するときには、その人がある分野で突出しているだけではなく、その人の業績が隣接分野にどういう影響を及ぼしているかということで採っていくべきだということが戦略の中に書かれていて、大変印象的に思ったことがあります。そういう人の見方、人の採用の仕方も含めて、多分大学の戦略の中で問われていくことになるんだと思います。狭い領域のシナジーというのも少し頭に入れさせていただきたいと思います。

それでは、次は林委員、どうぞ。

#### 【林委員】

ありがとうございます。

私もこの世界と伍する研究大学の会議に入れていただきまして、その委員の外の方々からの取組についていろんな声を厳しく頂くことがございます。第一に財政上のファンド運用への懸念。先ほど上山会長がいろんな厳しい意見もあるとおっしゃっていましたが。

それから、第2にこの目標を達成できるのかという、その点への懸念。そういった御意見があるものだと思います。

こうした声に対しては、この取組がいかに従来と異なる取組であるかという、その違いを説明できるか、ここが重要ではないかと思います。そして、私はそのポイントは、白石委員が本日の1回目のご発言の中でまとめて3点おっしゃってくださったコメントにあると思っています。

例えば、本日の各委員からの議論でも、Top10%論文数の指標で、日本で1、2位だからといって席をキープされることにはならないということは明確になったと思いますし、そういうメッセージは出すべきではないかと思います。

今後、金丸座長の下で文科省でまとめられる制度設計案が出されてくると思うんですけども、それを踏まえてこの会議では、従来の取組とここが違うという観点を明示的に具現化していくべきだと思います。

もう戦略的にここは隠してとかいうことではなく、今度はその違いを出していくべきではないかと考えています。

以上です。

#### 【上山会長】

ありがとうございます。

ファンド運用への批判は私の方でもいろいろ聞いていますが、気持ちとすると、これはある意味壮大な社会実験だという気はします。それに懸けるだけの価値が十分あると思って取り組んでおります。

ですから、従来はある資金があり、特定の限定された目的、政策要件に対して資金を投げるということでしたけども、今回はある意味でシステムを変えていくという、その意味での社会実験を行おうとしている。それが成功したときには極めて大きなリターンが我が国に発生するだろうというシナリオを持っている。これは金丸委員がおっしゃったことそのものなのですが、そのことをもう少し強調した方がいいというお言葉ですので、それは考えさせていただきたいと思います。ありがとうございます。

それでは、橋本委員、どうぞよろしく。

#### 【橋本委員】

今日の議論で皆さんの、大体ある意味で大きな方向性は一致していると思いますので、そこは私も同じなので置いておいて、3点ちょっと補足的なことで申し上げたいと思うんですけども、先ほどお金を入れると伸びるのは間違いないというふうにおっしゃった、小林委員も上山会長もおっしゃいましたけども、伸びる可能性があるのは間違いないのであって、お金を入れれば伸びるわけではないというのは、これも確実なんですね。

それで、それは先ほど富山委員言われたように、いろんな大学でこれに対してどういうプロ



ポーザルをしようという議論がかなりされていて、私の耳にもいろいろ入ってきますが、やはり我々の期待とは大分違うような議論になっています。これは確実にそうなっています。ですので、基本的な採り方としては、プロポーザルが我々のイメージと合うかどうかというか、議論していることと合うかどうかで採る採らないを決める、ということに将来なっていくんだと思いますので、是非これは事務局をお願いしたいんですが、今日の議論でも幾つかあったと思うんですけど、どういう大学になることを期待しているのかというのが、かなり一致している部分が多いですけど、そうじゃない部分もあったと思います。それを箇条書きにして、こういうふうになっていくことを期待するんだというのを、一回明確にする必要があるんじゃないでしょうか。それを全部皆さんに示して、それに合わせたプロポーザルを考えていただくというのをやる必要があるかなと思いました。これが1点目です。

2点目は、白石委員が言われた5とか6とか書いたらそれに合わせて底上げしてしまうことなんかあり得ないと、私も全くそうだと思うんですね。それに合わせて無理に底上げする。でも、現場はそういうふうに取りますので、そういうふうに白石委員が言われたこと、大変そのとおりだと思うんですが。

一方で、指定国立大学法人制度のとき、私は最初の議論、制度設計からして制定のところまで関わっていた部分と横で見ていた部分ってあるんですけども、実は最初のとくと全然違うような現状になっているんですね。それは、どんどん増えていってしまった。我々の作ったコンセンサスを見たら、最初は全くそうじゃなかったです。だけど、やはり大臣が替わる度に増えていくという。これは事実そうなんですよ。それは、止められないんです、実は。

ということがあるので、それをどうするのかという問題。だから私はどんどん増えていくことは何が何でも抑えなければいけないと思いますので、それは要件で抑えるんだったらそれはそれであるかも分かりません。その辺のことも含めて、そこはちょっと考えないといけないかなというのが2点目です。

3点目は、これは研究力の話で、これはもう先生方、皆さんが言っているとおりで、Top10%論文数で決められるものじゃないとか、もう当たり前のことなんですけども。一方で、やはり何も無いところからは育たないので、最低限の研究力がやっぱりあるということは何らかの方法で評価しないとイケない。

この何らかの方法で評価するとき、余り示していませんけども、実は事務局がかなりいろんなシミュレーションやっているんですね。例えば、安宅委員が何度も言っているPI当りに近いことも実はやっているんですね。実は余り変わらないんですよ。もちろん、非常に例外的

なものがぼこっと出たりということはありませんけども、でもそれもほとんどない。

だから今日のお話で大体皆さんアグリーメントできたんじゃないかなと思いますけど、これは飽くまでもやっぱりそういう大学になるために、最低限の土壌として、どれぐらいのものが必要なかということの目安としてそういうものを見るということぐらいにしかない位置づけで、飽くまでもプロポーザルであって、そのプロポーザルの魅力度に応じて、選定していくんだということを明確にするということによって、研究力のTop10%論文数となるかって、必ず議論がここでトラップされちゃうんですよ。それは避けたいなと強く思うので、そこは少し事務局の方もいろんなシミュレーションをやっているんで、いろんなことをやっても実はこれでやっても余り変わらないんだということを説得力あるような形で、データなり何か示す必要があるんじゃないか。そうしないと、実際公募の段階の方に行くとも本当にここでとらわれますよ。なので、そこは十分注意しなければいけないかなというふうに思いました。

以上、3点です。

#### 【上山会長】

今の最後の御指摘のように、本当にここの事務局、実際のところ物すごく頑張ってくださいって、あらゆる面での指標をチェックをしている。その中の上澄みだけこうやって出させていただいているということで、幅広くやっぱり世界と伍する大学が満たすべき要件と考えていくと、大体どの指標を使っても、このレベルは超えないと、というところはあるということだとは思っております。それをどういうふうに外に出していくのかということは今後考えたいと思います。

なお、そういう意味ではどういう大学のビジョンであるかという例示のことも、今、橋本委員から頂きましたから、とても重要な御指摘だと思いますので、もう少し明確化していくべきだというふうに受け止めさせていただきました。

じゃほぼ一巡しましたので、村山委員、どうぞ。

#### 【村山委員】

大学を選ぶときに、ある程度の現在の研究力を判断するというのは分かるんですけども、今日の議論を聞いていると、私、この委員をやめようかと思えます。今までは大所高所で、非常に日本の大学をどうするか、今は危機的な状況を何とかしなきゃいけないという方向で話が進んでいたんですけども、今日の話を知っていると、大体良い大学にちょっとお金を付けたら

リニアにその研究が伸びるだろうという議論にしか聞こえないんですよ。そうじゃなくて、2割お金を付けたら、2倍、3倍になるというような、ラジカルなアイデアを持ってくるような改革をしなかったら、今の危機は乗り越えられないと思います。そういう議論に今日はならない。

前回まではそうだったのに、何で今日になってこうなってしまったかは、ちょっと私、分からないんですけども、物すごく変わったような気がします。

### 【上山会長】

前半で我々はそうあるべき論をずっとやってきて、そのときに様々で御指摘を頂いたのは、じゃ具体的にどういう形で選んでいくのか見せろという、そういう話だったと思うんですね。

当然ながら、そのときには大きなビジョンで選んでいくということをずっと申し上げてきているわけですけども、そのビジョンで選んでいくときのよすがとして、ある程度具体性のある、透明性のあるものを出していかなければいけないということで、こういう資料を作ってきたということでもあります。

ですから、恐らく村山委員がおっしゃりたいというのは、非常に高い投資の効力のあるものに対して、もっと明確な意識で選ぶべきだということだと思いますが、それは多分出てくると思います。それは何らかの形で最終的なところで反映されていくんだというふうに思っております。

その次は、安宅委員。

### 【安宅委員】

ありがとうございます。

ちょっと村山委員引き止めた方がいいと思います。結構本当に。

それはそれとして、三つあるんですけど、一つは今、戦略的にコミットする先として、できている大学をただ選ぶという議論だと思うんですよ。ただちょっと大切、若しくはポテンシャルはすごくあるのに、やばくなっている大学という、砂漠になりかかっている場所をすくい上げるとするのはやっぱりどうしても大事だと思っていまして。その視点が要るんじゃないかというのが一つ。

あと、二つ大事な先があると思っていまして、本来の目的に即すと、やっぱりPh.Dがちゃんと世界標準的に育成されない問題というのは、僕は国家的に本来すくい上げるべきだと思います。

ってしまして、アメリカもP h . D育成グラントのようなところがあって、各大学が取り合っ  
て、それに応じてP h . Dを育てているわけです。

なので、P h . D育成ファンド、あるいはJunior facultyの育成ファンドのようなものとい  
うのは、10兆円から生み出される運用益で、大学から輩出する取組にはちょっと外枠である程  
度用意しておいた方がいいんじゃないか。それはファンドが大きくなるにつれて、育成できる  
部分の枠が増えていくという感じのものがあつた方がいいんじゃないかというのが二つ目です。

三つ目は、先ほどちょっと出ましたけれども、アメリカだったらNASAのJ P Lとか、M  
I Tの年間収入の3分の1は国防系のLincoln研究所の1,000億円ぐらいなんですけど。3,000  
億のうち1,000億は安全に限ると。他にもS E Iとか、多分村山委員がいらっしゃるBERKELEY  
LABとか。結局、戦略的な領域育成のための金を大学に突っ込んで、人を育てて、それで研究  
力も上がるような取り組みがもう1個あつてもいい。日本国としてはこういう領域を育てると  
いうもの。大学の枠の話と、Juniorの人たちを育てるというものと、領域育成のものという視  
点で、後ろの二つの議論が今余りないので、ちょっと本当はあつた方がいいんじゃないかなと  
いうのが、すごく大きい塊。

それと、配布額のロジックの議論を最初にしておかないと、これからずっと上がっていくと  
きにどうするのかというところがちょっと足りないなと思つてまして、P Iの数、院生の数、  
戦略的な領域育成みたいなもの、そういうものをどうやって入れるんだということは、多分、  
5年後、10年後は必ずけんかになっちゃうんで、今作つておいた方がいいんじゃないかなと思  
つたのが2つ目の塊です。

最後は、先ほどまでの話を踏まえてみますと、白石委員の話を全部含めて考えると、ちゃん  
としたリーダーが立つようにできて、ある程度長期政権が認められるような状況下じゃないと、  
多分、今やろうとしている変革は不可能であると思われるという話。

あと、恐らくアカデミックなポジションは難しいですけど、ある程度メタボリズム、代謝が  
できる仕組みがどうしても入れられないと、多分、変革がうまくいかないだろうということ。  
その結果、出ていく人がいっぱい出てくるのもしょうがない。その代わり入ってくる。

それと最後は、強いところ、東大、京大みたいなところはいいんですけど、そうじゃないと  
ころを育てていこうというのはエンカレッジメントとコーチングが必要だと思うんです。スト  
ラテジービルディングで、富山委員みたいな方が支えてくれるんだつたら、全然違う話になる  
わけです。そういう仕組みをセットでうまくやらないと、せっかく入れたものが。その分野で  
は天才的なんですけど、マネジメント能力というのは全く別の世界なんで、それをうまくや

ってあげる必要があるんじゃないかなと思ったというのが3個目です。

以上です。

#### 【上山会長】

ありがとうございました。

今日の議論の全体と通じるところなんです、我々とする一番苦しいところというのは、要するにinstitutionalizationというか、制度化に持っていくところなんです、結局。あらゆるものがそうなんです。ある理想型があり、それに対してプロジェクトが走っていくときに、そのプロジェクトの内容をどういうふうに制度化に持っていくかというのは、それぞれのいろんな人たちの意見がそこには突き刺さるんですけども、同時に制度というのはそんなにやわな制度ではもたないので、それぞれの方たちの意見を引き受けながら、多少矛盾することも引き受けながら制度の中に創り上げていくというところで、今、安宅委員がおっしゃったように、特に一番最初のご意見ですが、今止まっているかもしれないけど、ポテンシャルのある大学をどういうふうにこれから作るのかということが、税金としてどう映るのかということ、そのところは我々はかなり内部で議論をしています。

ポテンシャルを見るというのは、本当にエキスパートしか分からないところがありますから、幾ら指標をやったところで、それに関わっている大学なり関係者の熱意とか、あるいはネットワークとか、その辺も全部見て考えないといけないという意味では、重要な論点だとは思いますが。ただ、それを制度論として、これこれであるところまで落とし込んでいく、具体的に言ったら、例えば法律できちっとバックアップしてしまうというところまで持っていくところで、かなり苦しんでいるということでもあります。Ph.Dの問題も、PIの数も院生の数もみんなそこに恐らく帰着して、あるいはリーダーの問題もそうなんだと思いますね。

制度化の中で、仮に制度の中の幾つかが違う側面を持っていたとしても、できる限り拾い上げていく方向というのを考えないといけないと思っていますので、決してこれは今議論していることが決め打ちにならない方向には考えて持っていきたいとは思っております。

そのときに、これこれの形でこの制度をローンチするときに、皆さんはどのように見えるんですか、どのような形でそれを判断されますか、ということも当然ながら聞いていかないとけない。これはかなり幅広いステークホルダーへの周知、それから意見集約ということになるんだと思います。

今ちょっと村山委員がいなくなりましたが、当然ながら個々の研究者の、あるいは個々

の人たちが持っている意識というのは当然違うんですよね。領域によっても違いますし、それは今後ずっとフォローしていきたいと思います。私が一番最初に申し上げたように、この会議体の中では基本的にコンセンサスを得たいと考えていますので、ちゃんとケアしておきます。ありがとうございます。

では、白石委員、どうぞ。

#### 【白石委員】

どうもありがとうございます。

実は私、村山委員の発言は非常に深刻に受け止めまして、多分これは察するところなんですけども、これから何が起こるかというところ、このファンドができて、数年後には幾つかの大学が選ばれてということになるわけですけども、何となく多分この辺の大学が選ばれるだろうなという期待はあるわけですね。私も幾つかの大学の執行部に入っている人からちょっとお話は聞いたことがありますけども、自分たちは候補になるかな。そうすると、有り難いお経を書いたら取れるかなみたいな、そういう感じがあって、もしその期待のとおりに行くと多分このプロジェクトって失敗するんだと思うんですね。

じゃ、どうしたらいいのかといったら、余りいいアイデアはないんですけど、さっき橋本委員が言っておられたように、私もガバナンスとリーダーシップというのは極めて重要だと思いますけど、どういうビジョンで、どういう大学を作りたいんだというところを、やっぱり相当具体的に書いてもらわないといけなくて、御承知のとおり、余りこういうところで言うのは良くないかもしれませんが、科研費だとか、私の昔頂いたCOEプログラムだとかというのは、非常にきれいな作文をすると結構お金くれて、それで最終審査さえ切り抜ければ、あとは何か皆さんが楽しかったね、で終わっちゃうようなところもあるんで、そうならないようにするというところを、やっぱりこれからは是非詰めて議論する必要があるんじゃないかと思います。それだけです。

#### 【上山会長】

そもそもこの大学ファンドというのを考えたときから出てきている議論は、やっぱり強いところに結局いくんだろう、そういう議論だったと思います。そうではないということを繰り返して議論しているんですが、しかしながら選ぶ段階に応じて現状を把握しろという声も当然出てくるわけですね。歴史的な背景も考慮しろという声もあるわけで、それをずっと排除しながら

やってくるわけですが、最終的にそれがどういうことになるのかというのは、これは本当に我々の責務、責任が非常に大きいと思うし、恐らくここで議論してくださっている先生方もそこに関わってくるんだろうと思います。

それだけのかなり大きなチャレンジを引き受けているということは事実で、ですから現状容認型にはなってはいけないとは、これは本当に思っておりますね。それはもう大前提ですね。だから、このような具体的な数字を出してくると、必ずそういう話が出てくることは分かっていたんですけど、それでもここはくぐらないといけない門だと思っていますね。最終的なところに行くためにも、そういう批判も受けながら、くぐっていかないといけない門だとは思っていて、それはそれを引き受けながら、白石委員がおっしゃったみたいにやっぱり、最終的には大学が目指すべきものをそれぞれのところを出してきていただいて、それを我々が本物なのか偽物なのかを判断していくということになるんだと思っています。そういうものが出てこないのはもう考慮しないということなんだと思います。

#### 【橋本委員】

一旦決まっても打ち切るということですか。

#### 【上山会長】

ステージゲートの話について僕は多分、何回もやっていると思いますが、当然これ、何年かの後でステージゲートの評価が入りますので、それが約束を破ったということであれば、当然ながら何らかのパニッシュメントがあるということだと思います。それもやっぱりなかなか実はこういうものって切るって難しいんですよ、本当に難しい。難しいけれどもやっぴいかないといけないというふうに思っております。

その次は、菅委員。

#### 【菅委員】

ありがとうございます。

ちょっと村山委員が突然抜けられたんで、ちょっとショックですけど、彼が言いたいのは、多分、ラジカルに変わらないと日本も本当に駄目ですよということをおっしゃりたいんだと思います。今日はTop 1%、10%論文数のことについて最初に大分説明があったので、そういう印象を受けたのかもしれませんが。私は事務局と話したときにお願いしたことがあって、例えば

リストの中の化学が一番最初に出てくるんで、私の分野でもある化学をちょっと見ても、実は1位がそこに出てないんですね。私は実は1位が知りたいんです。1位、2位、3位がそこに出ていない。つまり、総合大学では1位、2位、3位が取れてないということなんです。

その分野、ちょっと下にいくと、生化学なんかは例えばハーバード大学が1位を独占していますけれども、じゃ2位がどこかと探しても、そんなに2位がすぐに見つかるわけでもなく、その1位、2位、3位、これがどういうところに当たっているのかというのは、我々ちょっと勉強しておく必要があって、実はそういうのがさっき安宅委員がおっしゃったような拾い上げる点になるかもしれない。

それから、社会的実験ということであると、いわゆるTop 1%、10%論文数において、総合的にはそうではないけれども、ある分野に特化したところだけの一つぐらい選んで、やはり実験してもいいのかというふうに考えます。日本の大学の中で、もしそういうTop 1%、10%論文数で、ある分野に特化したらすごくいいところ、東大を超えられるようなところがあるんだったら、そこは一つ実験として与えてもいいのかな。それがどれくらい本当に伸びてきて、それが世界のトップランキングの本当に上位に入るのかというのはとても重要な社会的実験かなと思いました。

以上です。

#### 【上山会長】

ありがとうございます。

レクのとくに1位、2位の話菅委員から頂いて、我々別に意図があったわけじゃないんですけど、それは記載はしませんでした。何個かの領域で1位になり得るかもしれないものを選ぶということを排除しているわけではもちろんないですけども、当初考えていたのは、やっぱり大学という、日本の大学システム全体のことを考えたときに、極めて幅広い大学院生、本当に何十万という人たちの今後に関わっているという気もあって、これまで歴史的に創り上げてきたものを一切関係なくというわけにはいかないだろうなという気持ちはありました。

というのは、やっぱりこの類いの社会実験は各国でやられているんですが、歴史的背景を無視して人工的にやったものというのは大体失敗しているんですよね。それは何がしかやっぱり歴史的な経路依存性みたいなのがどうしてもあるので、そこのところと今、菅委員がおっしゃったようなこととの折り合い。

我々はトップ層の大学をやっていますけども、同時に総合支援パッケージを今、作ろうとし



ていて、これは特定の領域が強いところも含めてほぼパラレルに選んでいく、支援していこうと思っているんですね。そのための資金、可能性を今一生懸命かき集めている。

だから、この大学ファンドだけで全部がカバーできる話じゃ絶対ないと思うんですね。その意味では、相当多層的に政策軸を作ろうとしているということを御理解いただければと思います。これはC S T Iの方から出てきます。今年度の末ぐらいまでに出てきますので。

ですからもちろん、僕とかがここにいるというために持っている情報と、ここにおられる先生方が持っている情報は当然ちょっと違うというか、量が違うので、なかなか誤解があるところもあると思いますけども、様々な要素を全部できる限り目指しながらやっていくしかないかなと思います。

ほかの先生方がいいがですか、御意見いただければと思います。今日出た話でも、結局本当に得意なものを伸ばしていくべきだというものと、やっぱりそれでも裾野のところもとても重要だろうという話も常に交錯するんだと思うんですね。そのことをある種どこか矛盾するものもあるとはいうものの、この大学ファンドだけではないところでも全部引き受けていきたいなというふうに思っております。

川合委員、今、手が挙がりましたか。

#### 【川合委員】

はい。さっき急にステージゲートの話が出てきたので、ちょっとそれと絡んで意見を申し上げたいと思います。

特色ある大学を作っていくのが多分、一番大事なポイントになってくると思うので、通り一遍の何か基準を設けて、これがいかないから切るというようにならないことを願います。

やっぱり10年、20年掛けて作っていくべきことを今やろうとしているので、5年目でどうだったとか、何か7年目でどうだったという、そういうせせこましい話に落ちないことをただひたすら祈ります。

そういう意味では、橋本委員がさっきおっしゃったみたいに、大学自身がこういうビジョンでやるんですという宣言をしていただいて、そしてそのビジョンに沿って、自らがこう評価してくださいということを言う。その評価基軸が妥当かどうかは誰かが見なきゃいけないんですけど、全ての参加大学が同じ基準で評価されるというようなことにならないように、ここが委員全員が合意していないと、国益のためになりましたかとかでびちっとしばって評価されたりすると、ちょっと心配になってきましたので、フレキシビリティをちゃんと持たせた形で運

用するという、日本の税金の使い方としては、今までになかったものを是非やっていただきたいと思います。

### 【上山会長】

おっしゃるとおりで、我々が考えていることというのは、一番最初に委員の皆さんと同意できたように、これまでの大学に対する、あるいはアカデミアに対する支援の仕方と全く異なる基軸で資金を促し、環境を整え、人を採用することをエンカレッジし、グローバルなところにそれぞれのところが持っていくような戦略を問うという、そういうことだと思うので。

これは、やれているかどうか、インデックスを達成しているかどうかではもう見られないところに入ってくると思うんですね。それはもう当然ながら、エキスパートでしか判断できないところに入っていく。そのエキスパート、もちろんアカデミアだけでなく、産業界も含めて、幅広いステークホルダーの人たちの専門知識、考え方がそこに反映していくというふうに思っていますので、そこは全くぶれていません。

何度もこういうことを申し上げないと、私もそちら側にいるときと同じように、クエスチョンだと言うと思います。それは覚悟を持ってやっていくべきだというふうに思っております。

ほかの方々はいかががでらっしゃいますでしょうか。ほぼ大体時間になりましたけど、今日は、我々とする具体的なものを出すということを求められましたので、ある程度踏み込みましたけれども、そこに対しての様々な御懸念も出てくるのは当然だと思いますが、これもある種のコミュニケーションのプロセスの中で必ず発生することですので、それを引き受けていきたいと思います。

それでは、本日は長丁場になりましたけど、いろんな御意見を頂きましてありがとうございました。本日の議論を踏まえて、次回は支援の基本的考え方について、たたき台を更にブラッシュアップして、提示をして、議論をさせていただきたく思います。今日でも、やっぱりここがちょっと足りないとか、こんな視点をもっと入れろという、いろんな御意見ありましたので、それを基にたたき台を作っていきたいと思います。

それとともに、文部科学省においては対象大学のガバナンスについて、これは金丸座長の下で検討を既にさせていただいております。そのガバナンスの検討状況を御報告いただいて、ここでもう一つ別のことを付け加えて、今日も随分お話ありましたけど、ガバナンスやビジョンが重要なんだということを補強しながら議論を続けたいというふうに思っております。

それでは、最後に事務局から今後の予定をお願いをしたいと思います。

**【渡邊参事官】**

今回は11月15日月曜日、10時からを予定しております。

以上でございます。

**【上山会長】**

どうも長い間ありがとうございました。

これにて本日の会議を終了いたします。

ありがとうございました。

—了—